

# 魔法のダイアリー プロジェクト 活動報告書

報告者氏名:緒方 優美

所属:北九州市立小倉南特別支援学校

記録日:2019年2月28日

キーワード:見通し、コミュニケーション、不安、スケジュール、動画・写真

## 【対象児の情報】

・学年 小学部1年生の男児

・障害名 知的障がい、自閉症スペクトラム

### ・障害と困難の内容

- ・今年度の4月に入学したばかりで、初めての学校生活に見通しがもてておらず、非常に不安を感じている。
- ・学校行事は大勢の人が集まることや会場が広いこと等の理由から、会場に入ることが難しい。
- ・伝えたい気持ちはあるが、表現することが難しい。
- ・学校での休み時間の過ごし方が分からない。学校での好きなことが見つからない。

## 【活動目的】

### ・当初のねらい

対象児の困りから、以下のねらいを設定した。

- ・A.活動に見通しをもって参加する
  - ・B.周囲の人とのコミュニケーションを増やし、自分の伝えたいことを伝えることができる
- ⇒AとBを行うことで、初めてで不安の多い学校生活を安心して過ごせるようにする

・実施期間 2018年6月～2019年2月

・実施者 緒方優美

・実施者と対象児の関係 担任

## 【活動内容と対象児の変化】

### ・対象児の事前の状況

#### 「A. 活動に見通しをもって参加する」について

- ・初めての学校生活で、不安な気持ちが強く、朝保護者と離れる時には泣いていることが多かった。
  - ・集団で行動すること、授業に参加することは、どのようなことをするのか見通しがもてずに不安なことから、授業中に立ち歩いたり、寝そべったりすることが多かった。
  - ・何をしたらよいのかということが分かると、自分で行動することができた。
- 入学後、3日で荷物の準備や着替えが一人で行えるようになった。
- ・大勢が集まる集会や式等は会場に入ることや参加することが難しい。しかし、遠くから覗こうと背伸びをする様子から、何が行われているのかは関心があるようであった。そこで、集会の動画を撮って見せると、「すごい」と言って動画を何度も再生して見ていた(⇒動画への関心あり)。
  - ・活動に見通しをもたせるために写真カードやスケジュールを提示していた。しかし、それらは、静止しているもののため、活動の流れをイメージしにくいようであった。
  - ・友達の様子や教師の話から、先に起こることを予想して、回避する等自分で行動することができた。

#### 「B. 周囲の人とのコミュニケーションを増やし、自分の伝えたいことを伝えることができる」について

- ・基本的に一人遊びをしていて、コミュニケーションをする等、自ら周囲の人に関わることは少ない。しかし、他の児童や教師の名前や顔は覚えている。

- ・自分の思いを伝えることが苦手である。「いやだ」と言うこともできるが、まだまだ少ない。嫌なことがあると、その場に座り込んだり、寝転がったり、静かに泣いていたりする様子が多く見られた。
- ・語彙については、多く知っているが、やり取りになるとオウム返しになることが多い。
- ・必要性を感じると、「〇〇ください」「△△してください」などはっきりと要求を伝えることができる。
- ・2語文程度の文構成も可能であった。

### <コミュニケーションサンプルの結果>

- ・対象児のコミュニケーションの有り様を捉えるために、コミュニケーションサンプルを行った。
- ・対象児のコミュニケーション行動について（図1）

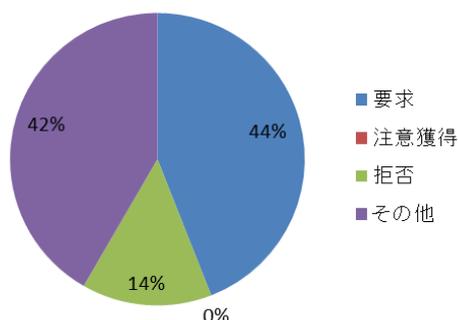
要求：44%、注意獲得：0%、拒否：14%、その他：42%

であった。また、要求のうち、73%が同一場面でのものであった（朝の会中、Aさんが前で係の仕事をしているときに、空いたAさんの席にBくんが座り、そのBくんに対して「(席を)代わって！」(戻ってと言いたい)と言う要求。対象児は、Aさんが怒った声が苦手なため、Aさんが席に戻ってくるまでに、Bくんを自分の席に戻し、苦手な音を回避したため)。

- ・その他に含まれるコミュニケーション行動について（図2）

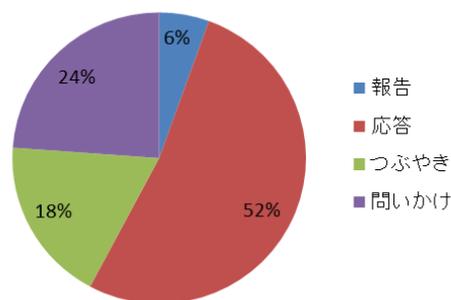
その他に含まれるものは、報告、応答、つぶやき、問いかけに分けられた。報告：6%、応答：52%、つぶやき：18%、問いかけ：24%であった。問いかけについては、全て「これです」という言葉であった。対象児は、自信がないことについて、教師の表情を伺いながら「これです」と言って、確かめることが多い（ズボンの前後や教材の片付け方、課題の答え等）。一方で、応答のうち、直前の質問の内容を理解しているのか否か不明なもの「うん」が35%ではあったが、教師の質問に対して、自信をもって答えているものが65%であった。しかし、1つの質問に対して、答えを1つ答えるのみであり、会話ややりとりというものはなかった。

#### コミュニケーション行動の割合



(図1)

#### その他に含まれる行動の割合



(図2)

以上の結果から、対象児のコミュニケーション行動について、自分の苦手な場面を回避したり、自信がもてなかったり、不安を感じたりする場面で、教師に質問したりと嫌なことを回避する手段としての役割が大きいように考えられる。対象児にとって、コミュニケーションをすることで、楽になる、楽しいと感じるような経験を積んでいく必要性を感じた。

### ○対象児のその他の様子

- ・教室内で好きなことは、蛇口を思い切りひねって水遊びをすること、棚の上など高いところに上ること、トイレの水を流すこと、エアコンや電気のスイッチを入れたり消したりすること、ドアを股に挟んで遊ぶこと、

床に寝転がること等で、教師によって制止されることが多い。

・保護者の連絡帳から、対象児は家庭で過ごす時、また外出時には、ぬいぐるみを常時携帯しているようである。また、そのぬいぐるみに「これはどらみちゃんの分ね」「次はスヌーピーの番です」と遊びながら話し掛けられているとのことである。保護者曰く、「ぬいぐるみがあることで精神的に落ち着いている」そうである。

・文字（平仮名）は未習得であった。始めに名前の平仮名をマッチングすることから行った。平仮名の読みが分かると、文字に興味を持つようになり、自分で掲示物の文字を指差して一文字ずつ読もうとする様子が見られるようになった。自分の名前と動物の名前の平仮名（20音程度）読むことができるようになったところで1学期が終了した。そして、夏休みが明けると、驚くことに平仮名を全て読めるようになっていた。

→音と文字が結びつくというルールを理解したことで、早く習得をすることができたと考えられる。

→「A. 活動に見通しをもって参加する」の実態にもあったように、対象児は何をするのか、何を求められているのか分かると、すぐに理解をすることができるということはこの平仮名の習得の様子から強く感じた。

## ・活動の具体的内容

今年度のねらい

「A. 活動に見通しをもって参加する」

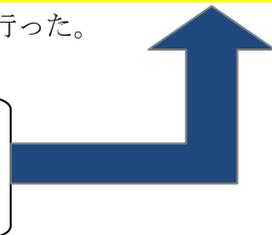
「B. 周囲の人とのコミュニケーションを増やし、自分の伝えたいことを伝えることができる」

に向けて、以下の3つの活動を行った。

①活動を知ろう

②思いを伝えよう

③好きなことをみつけよう※



※「③好きなことをみつけよう」について…

今年度のねらいには、この項目は表立っては出ていないが、対象児が不安だと感じる学校の中で楽しみを見つけたいという思いと、ねらいにある「人に伝える」という点で、まずは好きなことを通して、人に伝える必要性や周囲の人をコミュニケーションの相手として意識できるようになってくれたらと思い、この「好きなことをみつけよう」の活動を設定した。

### ①活動を知ろう

以下の4つを行った（●の活動でiPadを活用した）。

○一日のスケジュールの確認

●具体的な活動内容を動画で確認

○好きなことができる時間を可視化

●行事はリアルタイムで動画視聴

### ○一日のスケジュールの確認、○好きなことができる時間を可視化

・登校後の朝の学習の時間に一日の時間割カードを並べて、確認した。

・右のようなスケジュールの中に、自由に過ごせる時間の所にスペースを空けておき、自分でやりたい活動のカードを選択して、そのスペースに貼り付け、一日の中で、いつ好きなことができるかを見えるようにした。



## ●具体的な活動内容を動画で確認

・動画で授業の具体的な内容を確認することで、静止画よりも活動のイメージが膨らみやすいと考え、iPad を活用した。

・実施場面：

### ①授業前に活動内容、教材、場所、前回の授業の様子を見る

事前に授業の活動を教師がやっている様子や教材、場所等を撮影し、毎朝行っているスケジュールの確認の時と実際の授業の前に「この生単ではこんなことするよ」「今からこれするよ」と話をして、動画で確認した。

### ②活動の順番待ちの時に、友達が活動している様子を見る

活動の順番待ちをしている間に、何の時間なのか分からなくなったり、活動に向けての関心が途切れてしまったりしているように思い、順番待ちをしている間に、並んでいる列の前ではどんなことをしているのか、実際に友達が活動している様子を見て、自分も今からこんなことをするんだという見通しがもてればと思い、動画の視聴を行った。

### ③制作や調理等の作業の手順を見る

最初から完成形までの作業の手順を動画で確認した。



## ●行事の動画視聴

・iPad の録画機能で行事を撮影し、リアルタイムで「今はこんなことがあったよ」ということの動画を視聴した。

・一つの動画の長さは、続きが見たくなるように、短くした（5～10秒程度）。

・iPad の限られたディスプレイの中では、対象児が苦手としている、「人の多さ」や「広い空間」という要素を排除することができ、行事のみに注目することができた。



## ②思いを伝えよう

以下の3つを行った（●の活動でICT活用）。

### ●ぬいぐるみのぴーちゃん

●休日の動画を見て、楽しかったことについておはなし

○「先生」「もの」「ください」の絵カードで相手を意識したコミュニケーション

### ●ぬいぐるみのぴーちゃん

・犬のぬいぐるみのぴーちゃんには、博報堂の「Pechat」というものを使用し、会話ができるようにした。Pechat は専用のアプリから言葉を送信すると、ボタンの形をしたスピーカーから言葉が再生されるようになっている。

・対象児の事前の状況に記載している様子があることから、興味のあるぬいぐるみとお話することで、相手とのコミュニケーションに興味をもつきっかけづくりになるのではないかと考え、活用した。

・教室の対象児の小部屋に置いておき、対象児が話し掛けると、いつでも返答をするようにした。

・コミュニケーションに関心をもつことへの最初のステップとして、使用したため、一時的な活用になった。

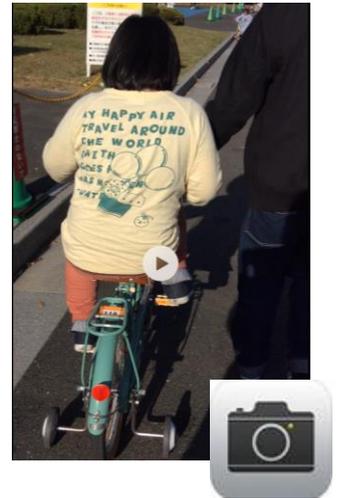


### ●休日の動画を見て、楽しかったことについておはなし

・不安を感じている学校の中での言葉の表出を増やしたかったため、まずは対象児が楽しいと感じることからやりとりが広がっていくのではないかと考え、この活動を行った。

・週に2回ある自立活動の時間に、対象児と休日の動画を見ながら、こちらから「どこに行ったの？」など質問をして、やりとりした。対象児は何を求められているのかが分かると、理解が非常に早いため、始めは、「どこにいった？」—「のうじせんとー」というようなヒントカードを使って、そのカードの通りに応えることから始めた。

・動画の内容は、「おでかけした場所」または「家庭で過ごした様子」、「その時の表情」、「過ごしている様子」等で、保護者に依頼し、休日の様子を iPad で撮影してもらった



### ○「先生」「もの」「ください」の絵カードで相手を意識したコミュニケーション



・学校での好きな遊びは、教師に制止されてしまうことが多く、制止されることへのストレスの軽減、また、学校で「楽しい」と感じられる時間を作るため、児童の好みのおもちゃを準備した。

・休み時間や学習後のお楽しみとして行った。

・対象児は、遊びの中で要求を絵カードを使って教師に伝えるようにした。

・絵カードの内容は、「人」「物」「ください」で、相手に注意喚起をしてから、要求を伝えるという流れにし、コミュニケーションの形を整えるようにした。

### ③好きなことをみつけよう

対象児の興味のあることを学級に用意した（おもちゃ遊び、絵本、お絵かき、感覚遊具遊び等）。ここでは、「お絵かき」で iPad を活用した。

対象児は、平仮名の読みを2学期開始までに習得し、文字への興味が高まっていたが、書くということになると、筆記用具をもつことに抵抗がある様子であった。しかし、担任にペンを持たせ、「3を書く（書いて）」「ハート描く

（描いて）」と要求をすることがあり、「描きたい」という気持ちがあるようであったため、iPad を活用した。iPad のアプリ「ひらがなおけいこ」「すうじおけいこ」を使用した。このアプリを使用した理由は、筆記具を使わなくても、文字が指で書くことができ、また、書く前に書き順の映像が流れ、それを見ることで、書き方を迷わずに書ける。更に、「1回書く度に、「上手に書けたね」と音声~~が~~流れる」という特徴があるためである。この活動は、毎日登校後にある、朝の学習の時間に行った。実施した期間は、9月から10月まで行った（対象児は筆記用具を使用して文字や絵を書くことができるようになったため、短期間の活用になった）。



### ・対象児の事後の変化

#### ①活動を知ろう

・学校の一日の流れに見通しをもてるようになってきた。

毎日何も見ずに、時間割のカードを順番通りに並べたり、こちらが違う順番で並べていると「あ、これちがう」と間違っていることを教えてくれたりするようになった。

・動画で活動内容を確認すると一人で活動することも可能になった。

自分で作業手順や活動内容の動画を、活動中に繰り返し見ていた。作業手順の動画を視聴したことで、活動への見通しをもつということの他に、その動画を自分の活動のモデルとしても活用できるようになり、「見通し」と「モデル」の2つの効果があったのではないかと考えられる。



## ② 思いを伝えよう

・発話が増え、表現が広がった。

実践前は、学校での発話する場面が決まっていたが、その場面に限らず発話をするようになった。また、教師の問いかけに対して、以前のような1問1答のようなやりとりではなく、言葉のキャッチボールができるようになった。

・友達や教師に気持ちや出来事を伝えることができるようになった。

実践前は、思いを伝えることができず静かに泣いていることがよく見られたが、自分から友達や教師に気持ちを伝えることができるようになった。

・相手を意識して、コミュニケーションをしようとするようになった。

自分から「見て」や「先生」と呼びかけをすることができるようになり、相手を意識してコミュニケーションをしようとするようになった。



## ③ 好きなことをみつけよう

・制止される遊びの回数が減少した

制止されていたトイレでの水遊びよりも、好きな活動が増えたため、制止される遊びの回数が減少したと考えられる。

・描くことが好きになり、好きな活動が増えた

休み時間には自分で「お絵かきする」と言って、「先生、紙ください」と要求を伝えてくるようになるくらい、好きな活動になった。筆記用具を持つこともできるようになり、iPadのなぞり書きアプリを行ったことは、そのきっかけになったと考えられる。



## 【報告者の気づきとエビデンス】

### ・主観的気づき

主観的な気づきは以下の4点である。

○注意獲得行動が見られるようになった（相手を意識したコミュニケーション）。

○問いかけに対して、具体的に答えることが増え、やりとりが多くなった。

○自分の気持ちを伝えられるようになった。

○好きな活動が増えたことで、制止される遊びの頻度が減少した。

### ・エビデンス(具体的数値など)

○注意獲得行動が見られるようになった（相手を意識したコミュニケーション）。

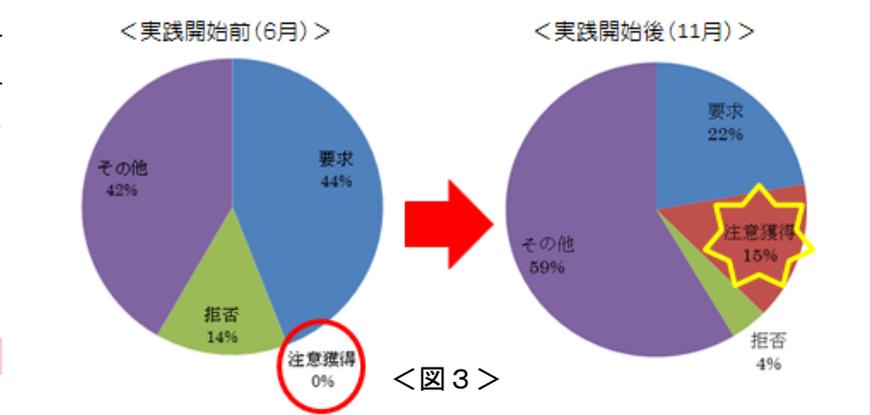
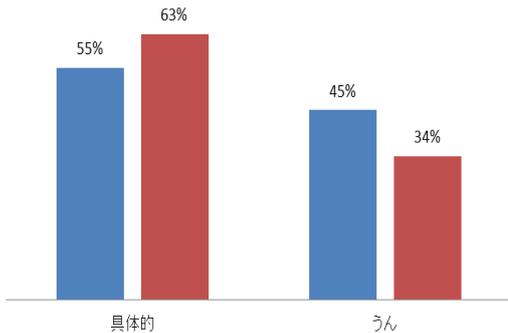
図3は、対象児のコミュニケーション行動の機能の割合で、実践前と実践開始3ヶ月後の比較である。図3に表れているように、注意獲得行動が見られるようになったことが分かる。

実践前は、自分から周囲の人へ働きかけたり、話しかけたりということはなかったが、実践開始後は、自分か

ら「〇〇先生」と呼びかけたり、「見て」と言ったりして、周囲の人の注意をひこうとするようになった。このことから、対象児は、周囲の人をコミュニケーションの相手として意識するようになってきていると考えられる。

**○問いかけに対して、具体的に答えることが増え、やりとりが多くなった。**

<グラフ1> ■6月 ■11月



<図3>

グラフ1は「問いかけに対する応答内容」を実践前後で比較している。実践開始前が青い方である。グラフでは、実践開始前も半分は具体的に答えているようだが、やりとりの内容も「Sくん、これ何」というような質問で、具体的に答えられるような質問が殆どであった。やりとりが増えたことで、担任からの質問や声掛けの内容も変化していると思われるが、実践開始後の方が問いかけに対してより具体的に返答することが多くなったと思われる。

グラフ2は、2回以上のやりとりが1週間あたりで何回あったかということと比較したである。

実践開始前は全くなかったが、実践開始後は8回と増えていることが分かる。

会話の例は、対象児がお絵かきをしている場で、  
 担任「これは何？」  
 対象児「ポテト」  
 担任「おいしそうだね～」  
 対象児「見て！チキン描いた」  
 担任「ジュースもよろしくね！何ジュースにしようか？」  
 対象児「カルピスにするー！」  
 のようにやりとりができるようになった。

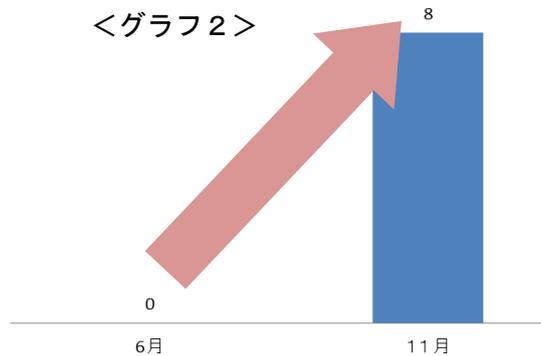
また、2学期終わりの懇談会では、保護者に「おうちでは、Sくんは以前から今のようにやりとりをしていましたか？」と質問をすると、『以前は、質問しても「うん」と答えることが多く、分かって答えているのかわからないことがありました。最近質問をすると質問の答えが返ってくるようになって、やりとりができるようになったと思います』とのことであった。

**○自分の気持ちを伝えられるようになった。**

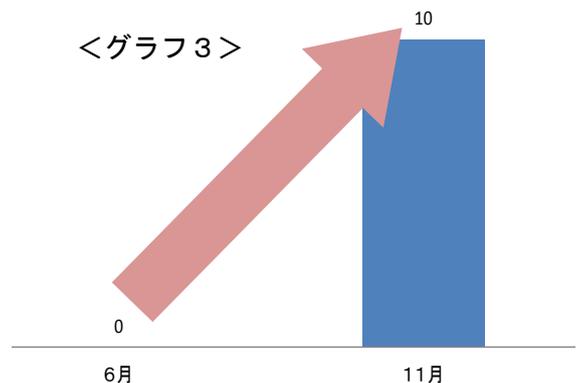
グラフ3は、実践開始前と実践開始後の自分の気持ちを教師に伝えた回数の比較である。

実践開始前の6月には見られなかったが、実践開始後の11月には1か月に10回、自分の気持ちを伝えることできた。「音がいやだ」「怖い」「楽しかった」「もっとしたい」「やめて」「いや」「びっくりした」等、様々な気持ちの表現ができるようになった。

<グラフ2>

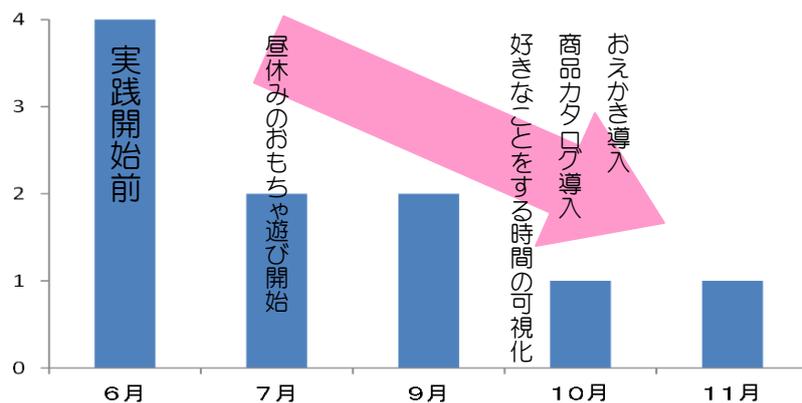


<グラフ3>



○好きな活動が増えたことで、制止される遊びの頻度が減少した。

<グラフ4>



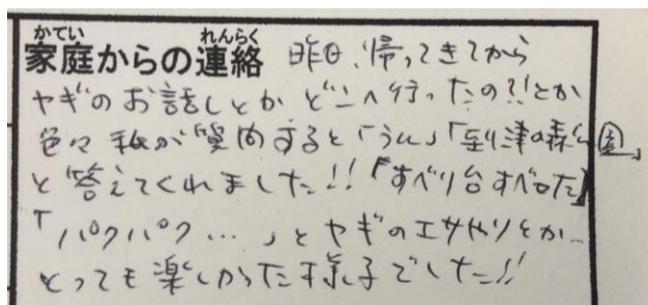
グラフ4は、制止される遊びが減少したことを表している。1日の休み時間の中で、トイレで水を流して遊んだり、寝そべったりしに行く回数の平均を示した。6月は1日4回程あったが、7月におもちゃ遊びを開始してからは、1日の平均が2回になった。そして、お絵かきや商品カタログを見るという活動をするようになり、更に、好きな活動のカードをスケジュールに選んで貼り、いつ好きなことができるのかを見えるようになってからは、1日あたり1回にまで減少した。学校での好きな活動が増えていくにつれて、制止されていた遊びの頻度が減少した。制止されることが減ると、その部分でのストレスは減るのではないかと考えられる。

・その他エピソード

○初めて自分から気持ちや感想を伝えた！

11月に秋の遠足で動物園に行き、動物を見たり、弁当を食べたり、アスレチックで遊んだりした。アスレチックで思い切り遊んで、学校へ帰っている時に、対象児が担任に「先生！」と声をかけてきた。担任が「どうしたの？」と尋ねると、「楽しかったね！また来ようね！」と初めて自分から気持ちを伝えることができた。更に、

遠足の翌日、対象児の連絡帳を見ると、保護者からのコメントで、遠足の日に帰宅すると、保護者に楽しかったことを話したことが書かれてあった。



○初めて自分から出来事について話をした！

3学期の始業式の次の日に、iPadがない状況で担任に、「おもちゃ買った！回転ずしのおもちゃ買った！」と話を始めた。担任が「誰と買いに行ったの？」と尋ねると、「ママと買いに行った」と答えた。更に、「どこに買いに行ったの？」と尋ねると、「おもちゃ屋さん！」と答えた。このようなやりとりを保護者に伝えて、出来事について尋ねると、お年玉でおもちゃを買いに行ったとのことであった。実践では、iPadで休日の動画を見ながら、出来事について話をしていたが、初めて*iPadがない状況でも、自分から出来事を話すことができた。*

○初めて学校行事に参加することができた！

対象児は、入学してから、学校行事に会場に入って参加することが難しかった。行事の前の移動の時に、いつも会場の手前のところで座り込んでしまい、会場に入ることができなかった。いつもはその座り込んだ場所で、行事の動画をリアルタイムで見えていたが、時折、首を伸ばして会場の方を見る等、行事自体には興味があるようであった。

3学期の学校全体で行う、卒業生を送る会の日、会場である体育館に移動しているとき、対象児はいつもの場所で座り込んだが、やはり会場の方を見て、行事のことを気にしているようであった。そこで、会場の中の様子を口頭で対象児に伝えると、対象児は首を伸ばして、会場の中を覗き込みながら会場の中に入って行くことができた。広い会場の中を見渡し、自分のクラスの列を見つけると、歩いて行き、並んで座ることができた。行事中は、何度か立ち上がって歩き回ることがあったが、またすぐに列に戻り座って話を聞いていた。号令等もよく聞いて、号令に合わせて「始めます」や「ありがとうございました」と一緒に言ったり、礼をしたりして、不安や恐怖を感じることなく、初めて行事に参加することができた。行事後、教室に戻ると、担任に「全校集会、頑張ったよ」と伝えてくることもできた。



## ・今後の見通し

### ①活動を知らう

対象児は、学校の授業に見通しがもてるようになってきており、また、やりとりができるようになったことで、口頭での説明でも、活動内容が対象児に伝わるようになってきた。今後は、動画活用を苦手な場所での活動やイメージの分かりにくい活動のみ行うようにしていく。

### ②思いを伝えよう

今回の実践では、対象児の「楽しい」ということに限定して、動画を見てやりとりを行ったが、今後は授業の振り返り等で動画を見て、「楽しい」以外の「頑張った」等の場面についてやりとりをするようにし、更に対象児の表現を広げられるようにしていく。

### ③好きなことをみつけよう

対象児の学校での好きな活動を更に充実させたり、帰りの会で翌日にある対象児の楽しみな活動を提示したりして、登校することへの楽しみをもたせるようにする。